

浄土

1992-6

昭和十四年五月二十一日
昭和十四年四月二十八日
平成四年五月二十五日印刷
第五十八卷
六月号
（運輸省 特別授受承認雑誌） 第三十五号
平成四年六月一日発行





六月の秀句

夏行とも又たゞ日々の日課とも

高浜虚子

磨りためし墨に塵なき夏書かな

高浜虚子

或時は谷深く折る夏花かな

高浜虚子

六 月 号



一向専修の念仏に信をいたして、
他の心なく、日夜朝暮、行往座臥
に、おこたる事なく称念すべきな
り。

——『念仏大意』

目 次

＝連 載＝

生も死も悦べる世界(七)……………須 藤 隆 仙……(2)

にこにこ法話

地球が危ない!(-)……………長谷川 岱 潤……(9)

〈ずいそう〉

「紅梅」の連歌 ……………曾 田 文 雄……(16)

季語やぶにらみ (24)

……………木 下 隆 一 ……(26)

壬申の乱(1)

◇◇心のしらべ・生活のうた⑥◇◇

“百人一首”〔一〕……………細 田 隆 善……(21)

表紙絵 小林治郎画

連
載

生も死も悦べる世界(七)



須^す
藤^{どう}
隆^{りゅう}
仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

往生ということ

浄土が、わが帰るべきふるさとであるということ、前回お話いたしました。それでは、そこへ往生するということは、どういうことでありましようか。

法然上人の教えでは、「往生^三というは此^こを捨て^かて彼^かに往^ゆき、蓮華に化生するなり」ということが往生だとされているのであります(『往生要集大綱』)。

即ち、阿弥陀仏の極楽世界に往って蓮華の上に生まれ変わることだということです。

これは大変に尊いご教示、重大なご教示でありまして、このところを私たちはしっかりと信解しなければならぬのであります。それはこれが浄土宗の教えの基本だからであります。このところが解らなければ浄土宗の教えは解りません。それでこのことについて説明いたします。

まず「此を捨て」とあるその「此」とは、この娑婆しゃば世界のことです。何で娑婆世界を捨てるのかといいますと、それは苦の世界だからであります。苦は百十苦などといわれるように無限にあります。根本的には生・老・病・死の四苦であります。しかもこの四苦というのは無明むみょう（無知）と無常ということが原因になって起きているのであります。無明というのは、道理を知らない無知なのであります。われわれは分っているようで、実は道理をよく知っておりません。道理を完全に知り尽せば悟りであります。お釈迦様と同じになれるのであります。しかしわれわれは凡夫で、なかなかそこまでは行きません。法然上人の、「池の水人の心に似たりけり濁り澄むこと定めなければ」の御歌のとおりで、今日はよく物事が解ってお利口な自分であるかと思えば、翌日はもうドロドロに濁った泥だらけの凡夫になり変っている、道理などというものを全く無視した世界に行動してしまっている、そこに次から次と苦が生まれて、苦の連続の生活であります。道理ということとはまた、頭では分かっている、実行していくことはむずかしい、これがすべて実行で

きたら、もう仏様であります。われわれには全部が道理にピッタリとはまった生活などはなかなか出来ないであります。

また、無常ということ、これはもう人の力ではどうにもなりません。諸行無常の真理真実でありますから、どうにもなりません。初めに記したように、どんどん移り変っている、流れ流れている世界ですから、それが「常無^{つね}し」、無常ということなわけで、実はこれも大きく見てみますと、全体が生きて、生きていくために無常なのです。例えば、私だけでは無常でなしにいつまでも生きようとする、すると次に生まれてくる人の出番がありません。それでは全体が生きている、動いていることにはなりません。次々と全体が動いていく、生み出されていくには、この私^{わたし}がまず、時が来たら死んでいかなければならないのであります。そうしないと次が出てこない。そうなると、私の死というものは、実は次が生まれてくる、次々と生まれてくる、そういう総体としての生かされる相^{すがた}の中の一環である、三回目のときに述べましたが、人の死ということも、よくよく観察すると、全体的には、それが殺す働きでなく、生かす働きの中の一環であることに気づくのであります。ただし、だからといって早く死ねということではありません。与えられた命を全うしてこの世とおさらばをするのであります。

こうなってくると、苦というものはこの娑婆世界とつきものでありまして、これはもう

絶対に離れられないものです。それですから、「娑婆」という言葉が出てきた。娑婆とは古いインドの言葉です。サンスクリット語なのです。日本語の中にはずい分とサンスクリット語が入っております。仏教から来たものです。それはともかくとして、娑婆というのはサンスクリット語で「サハ」なのです。このサハがそのまま中国に入って、これを漢字で娑婆と当て字したわけです。サハという音だけをそのまま漢字で表現した、こういうのを音写といいます。それではそのサハの意味はというと、これは「堪え忍ぶ世界」ということであります。あまりに苦が多すぎるから堪え忍んでいかなければならない世界、それで漢訳語としては「忍土」^{じんど}なのです。忍ぶ世界、忍んでいく世界、なんです。忍土といったほうがピンと分かるのですが、とにかく娑婆というところは、そういうところである。それですから捨てなければならぬ。厭離^{えんり}という言葉を使っておりますが、「厭^{いと}離脱」しなければいけないのであります。

そしてそれは、単に苦しいから、自分が苦痛だから、それで捨てる、厭離するというのはなしに、話を初めにもどしまして、それは輪廻^{りんね}する世界、またその娑婆へ逆もどり（廻りもどり）してしまふ、そういう向上のない世界ですから、そんなところにいつまでもグズグズしていたのでは、真人生へ到達することなど出来ない、人として生まれて来た真の意義を全うすることが出来ませんから、それで捨てるわけにあります。

そういうことが段々解かってきますと、今度は、「彼に往き蓮華に化生する」ということが何であるか、それが解つてきます。つまりこの世を捨て、厭離するのは、苦の世界・輪廻の世界で、とてもこんなところにいたのでは、自分が他を生かすような力になど、とてもなれっこない、自分のことだけで汲々としていなければならない、それで別の世界（蓮華化生の世界）へ往くのですから、その蓮華化生の世界とは、「自分が他を生かせる世界」であるわけです。極楽とは、そういう世界なのであります。蓮華の上に生まれるというのは、そういう意味があるのであります。蓮華が泥沼に咲いてあの美しい姿、清い姿となることはご承知のとおりで、それで仏教では蓮華を最上の華とするわけですが、その蓮華の上に生まれ変わるといふことは、私が泥沼から、それを超えた最上の世界に生まれ変わったといふことであり、その最上の世界とは、「他を生かせる世界」そのものです。そのところを善導大師様は『発願文』に、「彼の国に到りおわつて、六神通を得て十方界に入つて、苦の衆生を救摂せん」とお教えになられた、極楽往生したならば、今度は再び十方界に廻つて、娑婆で苦勞している人たちを救つてあげましよう、こういうのであります。即ち「他を生かす力」となるために極楽へ往生する、蓮華の上に化生するのであります。『観無量寿経』にはまたこのことが、「業障を淨除して諸仏の前に生ず」と説かれ、また「此の人はいずれも分陀利華なり」という有難いお言葉で示されているわけであります。分陀利

華というのは、これもサンスクリット語のブンダリーカの音写でありまして、蓮華のこと
で、しかも単なる蓮華ではない、最高最上の白蓮華をいうのであります。

このようにして、蓮華化生とは私が蓮華の人となる、最高最上の人となる、仏教の理に
ピッタリとかなった理想的人間（他を生かす人間）になるということ、善導大師はこれを、
好人、妙好人、上々人、希有人、最勝人、と仰せられたのであります（『観無量寿経疏』）。
こんな有難いことがありますか。こんな悦ばしいことがありますか。ですから
浄土宗では、この榮譽を頂いて、法名の中に「誉」の字をつけるわけであります。誉号と
申します。法名中に誉号があれば、ああ、これは浄土宗の人だなあとすぐに分かるわけ
あります。

さて、それでは、蓮華化生の意味は右の説明でお判かり頂けたと思いますが、これが実
際に、具体的には、どういうことかと申しますと、これは死後人間はどうなるかという問
題になってきます。今日、社会はこのことに非常に関心をもたれ、変な表現かもしれませ
んが、「あの世ばかり」といった感があります。丹波哲郎さんの死後の世界談はまあお愛
嬌な面があるにしても、臨死体験の真面目な本が外国からも出版されております。日本で
も評論家の立花隆さんが懸命にこの問題と取り組んでおられるのは周知のとおりでありま
す。立花さんの研究はNHKや民放のテレビでも放映され、また『文芸春秋』などにも成

果を發表しておられますので、ご覧になられた方が多いと思いますが、立花さんは極めて注目すべき發表をしておられます。

紙数の都合で詳しく述べられませんが、私なりに非常に考えさせられる点を少し記しますと、立花さんの研究でも、アメリカのお医者さんなどの研究でも、大体共通したものが明らかになってきていることです。

それは、臨死体験をした人たちが、日本人であれ欧米人であれ、ほぼ似たようなことを語っている点であります。次回はそのことを述べて、拙稿を終わりにしたいと思います。

(つづく)

『江戸物語』

細田隆善(豊明)著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

●四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録 ●定価一八〇〇円

《発行・発売》 ノンブル社

東京都新宿区新小川町六—三九—七〇—
電話(〇三)三二六九—一二九三 三二六七—六六三七
振替(東京)七—一一〇九三／千一六二

地球が危ない！(一)

「ねえお父さん、今日学校でね、ある子
がもうじき地球がなくなっちゃうんだっ
て話したけどさ、うそだよねえ」

「その子、どこで聞いたって言ったの」
「ノストラダムスとか、何とかって」

「ああ、ノストラダムスの大予言だね。」

長谷川 岱潤
(東京・品川区戒法寺住職)

一九九九年の七月に、恐怖の大王が空か
ら下りてきて、この世界が終わると書い
てあるんだよ。もう二〇年も前に、日本
でも翻訳出版されて、大ベストセラーに
なった本だよ」

「お父さんはどう思うの」

「そういう予言は、あくまでも予言なんだから、深刻になることもないと思うな。ただねノストラダムスがどうのとかではなくて、そうしたことが話題になるということは、現実の状況というものを、見過ごしてはおけないんだよ。その本が出た時日本ではオイルショックがおきて、大混乱だったんだ、それこそ明日の生活がどうなるんだろうかって、みんなすごく不安だったんだよね。だからその本も爆発的に売れたんだよ。そして今はその時よりも、もっと深刻なんだよ」

「だからまた話題になってるんだね」

「お父さんはね、そんなノストラダムスの予言どころじゃなくて、実はもっと地球の将来について心配しているんだ」

「え、どうして、今予言なんて気にするなって言っただけじゃない」

「それはね、去年東京と大阪の科学者たちが約一年かけてまとめた報告書があつてね、題名を『ジオカタストロフィ』（地球の破滅）といい、二〇九〇年に人類は滅亡するという報告書なんだよ」

「やだ、科学者の人達がそんなこと言っているの、そっちの方がもっと怖いんじゃない」

「でしよう。それを見るとね、破滅は三段階で進むんだそう。第一段階は、地球の人口が二〇二四年までに今の一・六倍になって食べ物や資源が不足してくるけれども、みんながよい生活、よりよい生活がしたいという気持ちは変えられない

いので、どんどん深刻になってゆくそう
だ。そして第二段階は、みんながその滅
亡する危険性に気がついて、先進国では
生活を押さえること、我慢することを
知って、経済成長が止まるんだね。しか
しまだ生活が豊かでない南の国々では生
活の向上を求めることをやめられないよ
ね、それが二〇五七年まで続くんだそう
だ。そして第三段階では、結局資源の限
界が明らかになって、世界は無秩序状態
になり、弱肉強食の時代になって、強者
だけが生き残って、環境破壊も進んで、
おそくとも二〇九〇年までに人類は全員
滅亡するとなっているんだ」

「ええ、あと九八年後っていうこと」
「それから別の報告書にはね」

「ええ、まだあるの」

「スイスの環境保護団体やオーストリア
の研究所の発表では、地球の温暖化がこ
のまま進んでゆくと気候が変化してしま
い、雪がなくなり、高山植物が絶滅し、
害虫が増え、森に火災がおきて、ヨーロッ
パアルプスでも三十年以内にスキーがで
きなくなると言っているそうだよ」

「何か暗くなってきた」

「お父さんが二十年以上前に読んだ渡辺
格という生物学の先生の本に、『人類の
将来は恥ずべき生存か、尊厳なる滅亡か
の二つの道しかない』ということが書か
れていて、とてもショックを受けたこと
を今でも覚えているけど、現代は滅亡へ
の第一段階をすでに歩き始めていること

を思うと、よりそれが現実的だし、また
恥ずべき生存さえも残されていないと言
われてしまっているんだよね」

「恥ずべき生存と尊厳なる滅亡ってどう
いうこと」

「ミーちゃんには少し難しい話になるけど、今世界は、文化が発展している地域と昔ながらの生活を続けている地域とに分けることができるんだよ。文化の発展している地域というのは主に北に集中し、昔ながらの生活をしている地域は南に集中しているんだ。文化が発展するということとは、資源を産業に利用したり加工したりするわけだから、南の地方は資源や食べ物が採れるところで、北はそれを使うところという構図ができてしまっ

たんだね。食べ物を例にただせば、南の人は採れたものをそのまま食べているんだけど、北の人は一度家畜の飼料として食べさせ、牛や豚を大きく育ててから食べるわけだから、南の人は北の人の三倍も人口があるんだけど、食べ物は半分の量を食べていることになっているんだそうだよ。いろいろな資源、たとえば石油なんかを例にとったって、圧倒的に北で使っているわけだよ。だから、北の地域はどんどん豊かになり、早くて快適で便利な生活を送れているわけだけど、一方南の人たちはどんどん貧しくなっているのが現実なんだよ」

「それで、恥ずべき生存ってなあに」
「だから今のような状態をどんどん進め

てゆくこと。北の人が、南の人たちのことをまったく考えずに、むしろその人たちに悪いところを全部押しつける。たとえば公害をだす工場をそっちの国に作るとか、原子力の有害な廃棄物をそっちの国に捨てに行くだとか、自分たちの欲しい食べ物だけを作らせるだとかして、そちらの国の人々がどんなに困ろうが、どんな状態になろうが、お構いなしに行なうこと。自分たちが早くて便利で快適な生活がおくれ、おいしい物を食べられることだけを考えること。そういう自分さえよければという考え方。そして、やがては友人さえも敵に回し、強い者だけが生き残ってゆくこと。そんなこといいわけないよね、仏様だって許してくれないよ

ね。それでもそのほうがいいという生き方を恥ずべき生存と言ったんだよ」

「それじゃ、尊厳なる滅亡って」

「その反対さ、今この地球上に一緒に生きていることは、どんな人でもみんな関わりがあるってことなんだ。それを仏様は『縁』って言っているよ。だから、みんなが支えあって共に生きてゆくことが一番大事なことだという考えを持って、北の人たちも自分たちの生活を少し押さえて、必要以上の食べ物や、必要以上のぜいたくをやめることにして、そして南の人たちの生活の手助けをし、南の人たちも安全で豊かな生活がおくれるようになることを目指してゆくこと。これは仏様も喜ぶ人間の道であるけれど、地球の

資源に限界があるために、尊厳なる滅亡と言ったんだね」

「それじゃ、どっちもやだ」

「そして科学者たちは、やがて人類はその両方の道をたどって、結局は絶滅してしまうと言っているんだ」

「絶望的ね」

「でもね、お父さんはもう少し人間の仏性、仏の子としての人間を信じたいんだ」

「希望があるってこと」

「そう、さっきの二〇九〇年の話だけれど、第一段階、第二段階、第三段階をそれぞれ三十三年と計算しているんだよね。これは余りにも単純な気がしてならないんだ。北の地域の人たちが自分たちの生き方の誤りに気づくのに後三十三年

もかかり、またその後も南の人達は北と同じ生き方、目指す道を変えないと予想しているけれども、果たしてそうだろうか。この予想をしている科学者たちも、今の自分たちの生き方、目指している道、一見豊かな生活、そうした今の生活がいいもの、正しいものと思っているんじゃないか。早くて便利で快適な生活、これが人間にとって幸せな生き方だと思いいこんでいるんじゃないのかなあ」

「ええ、違うの」

「うん、違うと思う。そのことに世界中の人が早く気がつけば、人類の滅亡もなく尊厳なる生存が約束されると思うよ」

「え、本当。尊厳なる生存！」

「それが仏様の教えだから」（つづく）

◎ “維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰會

法
話

「紅梅」の連歌

曾 田 文 雄

(出雲市大念寺住職)

一

仏教に花は切離せない。禪僧の墨蹟を集めたカレンダー、四月には「拈華示衆衆皆默然」が充てられ、隣町の出雲大社

では、いわゆる「華燭の典」が連休から五月十五日の祭礼にかけて一段と盛んになるが、その「華燭」は仏教から出た語、だという。

それにしても、最近特に、花の種類が増えたように思う。筆者には、町に見か

ける多彩な花々の名前など、到底覚えきれない。而して、その多くは外国産である。この渡来植物につけて思い浮かぶ、平安時代の例を記してみたい。

二

勅撰和歌集の三番目は『拾遺和歌集』である。その『卷十八』は「雑賀」部であるが、その中には、

中將に侍りける時、右大弁源致方
朝臣のもとへ、八重紅梅を折りて
つかはすとて

右大將実資
流俗の色にはあらず梅の花

致方朝臣

珍重すべきものところそみれ
という連歌が含まれている。これの大意は、

右大將の実資が、中將だった頃、源致方の所へ、八重の紅梅に添えて、
「この梅は世間一般にあるような平凡な色をしてはいないよ」という意味なる、和歌の、上の句を詠み送ったところ、致方は、「いかにも、珍らしく大

切にすべき梅だと存じます」と、下の句をつけて返した。

というのである。ただそれだけのこと。なのにどうして、これが勅撰集に採られるほどの値打ちがあるというのだろうか。

三

この連歌を十分に鑑賞する為には、当時の様相の正確な把握が必要となる。

和歌一首を詠むのに、二人が上・下に分担した例は、『万葉集』はじめ既往の

歌集に見られるもので、これに問題はない。

「梅」であるが、これには白梅と紅梅がある。その場合、『万葉集』を見るなら、

春の野に 霧たちわたり 降る雪と

人に見るまで 梅の花散る(巻五)

山高み 零りくる雪を 梅の花

散りかもくると 念ひつるかも

(巻十)

のように、「降りくる雪を梅かと思う」乃至は「散る梅を雪が降るかと思うことだ」の如く見做されている。雪とは古来、

白いもの。したがって、梅も当然白梅、ということになる。つまり、平安中期以前であれば、梅は白梅が普通で、紅梅は、中国渡来、漢土からの新植物、珍品だったのである。

故に、実資は、かような貴重品扱いの、舶来の紅梅、それも八重の梅を送ったわけであった。

四

ところで、かの連歌、珍貴な品の贈答でもって構成された連歌と迄は承知できたが、左様な、物品の珍らしさだけに連

歌の価値がある筈はない。勅撰集に選ばれているからには、歌そのものに良さがあつた筈。では、その良さ、面白さは、どの辺りに見出せようか。

そもそも和歌とは、「やまとうた」と呼ばれる通り、日本で発生し、詠まれ続けて来たからには、用語も「やまことば」が主体となる。今日でこそ、外来語・外国語を屢々見かけるものの、かつては殆んどが和語、即ち「やまとことば」で占められていた。

そういう中であつて、この連歌は異様である。「流俗」「珍重」なる漢語が使われている。別な「やまとことば」で置換

えることもできたらうに、何故か。

理由は、前節の説明から既に御判り頂けよう。贈答物品が中国渡来のものであるからこそ、歌中に中国語即ち漢語を持ってきたのであった。因みに、贈られた句内に用いられた「流俗」を受け、「珍重」を用いて返句に応じたわけである。

和歌では、めったに使われない、漢語に対する漢語を、そこに、この連歌の特徴、面白味が存し、ひいては勅撰歌となり得たのであった。

五

最後に、この連歌が「賀」の部に入っているのはどうしてか、という点に触れる。

「珍重」なる語、この連歌と同時代の辞書を通じては、めでたいと喜び祝う語であると知れる。そこに、この連歌が「雑賀」の一つとなったことが推測されるのである。

今なら格別珍らしくもない「紅梅」が、平安の当時、公卿間に珍物として贈答されていて、揚句には、勅撰集に載るまでの和歌さえ生み出したことに、甚だ興味を覚えることである。

心のしらべ・生活のうた(六)

世界に秀でた「愛」の詩集

ボエム

“百人一首”〔一〕

細田隆善(俳号豊明)

「百人一首」は藤原定家(ていけい) (一一六二—一二四一) が文暦二年(一二三五) 三百五十年間にわたった秀れた歌人、一人一首を選んで歌集としたものである。これは妖艶な歌風と流麗な歌調の歌を集め、定家の幽玄妖艶の歌に対する美意識によって選抜編纂された点にその価値がある。「百人一首」は長くかつ広く愛唱されて現代にうけつがれ、歌留多にまで利用さ

れ普及された歌集である。「百人一首」は恋や愛を歌にした作品が多く、このよ
うな愛の詩集は世界にその例を見ないものである。「百人一首」は「小倉山莊色紙和歌」といい、ほかに百人一首と称するものがあるので「小倉百人一首」という。「小倉」はこの歌集編纂縁りの京都の小倉山をいう。

「百人一首」編纂の藤原定家「さだいえ」

であるが、歌人としては「ていか」と読み、鎌倉時代前期の最大の歌人であり歌学者でもあった。父は平安、鎌倉時代の歌人、藤原俊成、「としなり」であるが歌人として「しゅんぜい」という。母は藤原親忠ちかの娘、定家は応保二年（一一六二）生まれ、歌才に恵まれ、十七歳にて名をなし「近代秀歌」の新風をまきおこし、建仁元年（一二〇一）には「新古今和歌集」の撰者となり元久二年（一二〇五）世に出されて、和歌史上大きな波紋を投じた。定家は権中納言ごんちゅうなごんの職にあったが、天福元年（一二三三）職を辞し出家して、明静みよしずと称した。七十四歳の晩年に「百人一首」を撰集し、仁治二年（一二四一）八月二十四、八十歳にして没し、墓は京

都市上京区しやうきうくじ相国寺にある。定家の歌風は嫡子ちやくしためい為家によって継がれた。定家の偉業は「新古今集」「百人一首」にとどまらず治承四年（一一八〇）二月五日、十九歳のときから「百人一首」を撰集した七十四歳に至る五十六年間にわたり書きつづけた「明月記」は貴重な史書である。この書は歌の記録のみならず政治生活、経済生活、宮廷社会の内部にわたり、文学作品としても芸術性の高い記録であり、歴史史料である。

宇都宮うつのみやは北部関東地方の中心地として古来栄え、宇都宮家は関東の富強な豪族として誇った。当時は宇都宮の武将、宇都宮頼綱よりつな（承安二年（一一七二）—正元元年（一二五九）、八十六歳没）は後半

生は京都の小倉山に豪華な小倉山荘に住み、和歌を愛好し、当代和歌の大家である定家と親交し、定家の嫡子為家に頼綱は娘を結婚させたほどであった。小倉山は嵐山に近く高さは四百メートルほどであるが紅葉の名所として有名であり、常寂光院、二尊院があり、祇王祇女、仏御前たちが隠棲した祇王寺さらに化野の念仏寺も近い。しかし小倉山荘の跡地を調べたがさだかではなかった。

頼綱は將軍実朝暗殺事件（建保七年（一二一九））に潔白であることを証するため出家し、実信房蓮生と称して、後半生は小倉山に住んでいた。頼綱は小倉山荘の襖に、歌壇の第一人者であり親戚でもある定家に依頼して、古来から著名な

歌人の歌、百首を選び、さらにその歌人の肖像画を甥の藤原信実（のぶざね）に依頼をした。信実は生没不詳であるが「三十六歌仙絵巻」を描いた秀れた画家であった。この襖絵は室町時代まであったようである。

「百人一首」の中に猿丸大夫の歌があるがこの作者は人物不詳、奈良後期、平安前期の歌人といわれ三十六歌仙の一人になっているが、宇都宮の伝説歌人ともいわれているところから、宇都宮頼綱の地縁関係により「百人一首」に入られたものと思う。頼綱は蓮生と称し浄土宗西山派の開祖証空上人（治承元年（一一七七）—宝治元年（一二四七））に師事した浄土宗の信者であった。証空上人は法然上人の弟子。頼綱は京都の善峯堂、往生院

等の再建に尽力した。

「百人一首」は奈良、平安、鎌倉の三代にわたり三百五十年間の有名歌から、定家好みの妖艶美の歌を選抜したものである。百首の内訳は、春六首、夏四首、秋十六首、冬六首、恋四十三首、旅四首、その他二十一首であるが、半ば近くは恋の歌であり、定家好みの愛の賛歌である。華麗、優艶な叙情歌集である。

しかも歌は全て「古今集」以来の勅選和歌集に集録されているものである。歌人は男性七十九名、女性二十一名であり、男性の中には僧侶が十三名いる。

「百人一首」は優雅、流麗な作品の多いことから室町時代から広く親しまれ、とくに江戸時代より流麗リズムカルな歌調

から「百人一首歌留多」に利用されて、多くの人々が暗唱するようになり、現在も歌留多の会は盛んに催されて正月の行事になっている。

「百人一首」は定家の芸術的美意識によつて選集されたものであり、定家の幽玄の美、妖艶の美、愛と死の美等々の歌風思想は後世に影響を与えたものである。世阿弥の能楽に、近松の浄瑠璃に、江戸歌舞伎とくに南北の妖怪性に、黙阿弥の脚本に、西行宗祇を尊敬した芭蕉の俳諧に、近代文学等々にゆかりや影響を持ったのである。

次回から定家「愛」の賛歌「百人一首」を一首づつ賞詠し、作者の時代的背景を眺めることとする。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』六月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林泊郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋二―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

壬申の乱(1)

忍び寄る秋風が、時折短檠の焰を揺らした。
その度に大海人皇子が机上に広げた木簡を、
明るく照らしたり暗くしたりした。木簡は各
階層から提出された戦犯名簿であった。

近江朝廷軍との戦に勝った翌日、大海人は
直ちに自軍(吉野方)の論功行賞を行ったが、

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

戦犯の処分は一日延ばしにして、かれこれ一
と月近くが経とうとしていたのである。戦犯
容疑者の数は、有名無名併せて数百名にもの
ぼっていた。

「犠牲者はなるべく少なくしたいが、あまり
少なくても示しがつかぬか」

主だった者十名の名前に朱線を引いてからでも、もう何日も経つ。

「禍根は速かに断つべしです。何を逡巡されておられますか？」

大海人の耳に、どこからとなく鎌足の声が聞こえてきた。

「いつでしたか、皇子は帝に降りかかる火の粉は、俺が代わって被る。帝の意に添わぬ奴は俺が斬る」と仰しやうた」

「確かに。そして、貴公に『お出来になれますかな、お出来になれますまいよ』と言われた」

「此度の乱は、皇子ご自身に降りかかった火の粉でございます。英断を以てご処分なさいませ」

鎌足が死んで、やがて三年になる。鎌足が

生きていれば、いかなる断を下すか、いや鎌足がいれば、此の度の乱は起こらなかったであろうと思うと、五六歳で卒した鎌足を惜しむ気持ちがあふくと大海人の心を締めつけた。

「もう、これからは額田様のご神託におすがりする必要もなくなることでございましょう。皇子ご自身の裁量で政は推進致さねばならませぬ。額田様をお楽にさせてあげなされ。此度のことで一番お心を痛めておられるのは他ならぬ額田様、何しろ娘婿を亡くされたのですから」

「それは俺とて同じことだ。大友は甥であり、我が娘十市皇女の婿であった」

「さあ、それはどうですか。大友皇子が甥御様であることは確かですが、さて、女婿と

いうのは……。何分にも十市様は神の御子であらせますゆえ」

「言うな。十市は俺が額田に産ませた子だ」

「しかし、十市皇女誕生の時、皇極上皇は百官を召して、『額田が神の御子を宿し、今朝女児が誕生した。やがては日嗣の皇子の妃となる御子である。従って十市皇女と命名した。皆の者、心してお育て申し上げるように。なお、本来なら中大兄皇子に養育を任すべきであるが政務繁多ゆえ、この任は大海人皇子に委ねる。ゆめゆめ疎漏なきように』と仰せられました」

「たわけたことよ。母者は何もかも承知の上で、俺に十市を押しつけたのだ。神の声を聞く者が人間の子を産んだとあっては具合が悪いからの。そんな奴が述べる神託は誰も信用

しないものな。誰が決めたか知らんが、巫女は古来未通の処女とされておる。つまり年端の行かぬ女子ということだ。その点から言えば、額田は年を取り過ぎていた。俺が額田をものにした時、確かに未通の処女ではあったが、俺より六つ年上だから二六になっていた」
「これより天が下知らしめす君が、ものにするなどという下等の言辞を弄してはなりませんぬ」

「いかぬか」

「当たり前です。皇子は他の公子方と違ってざつくばらんところが庶民に親しまれておいですが、これからはそうは参りませぬ」
「窮屈なものだな。望むべくしてなった訳でもないのに」

「すべては天命。避けて通る訳には……」

「^(註1)古人大兄皇子や^(註2)有馬皇子の死も天命であつたと貴公は言うのか」

「……」

「答えろ！」

大海人の呼び掛けに鎌足の答はなく、短檠の焰が大きく揺らめいただけであつた。

（註1）

舒明天皇の歿後、皇位継承問題に絡み、舒明の長子古人大兄はその意思無しとして吉野に出家隠遁したが、大化の改新後、謀反を企てた廉により中大兄皇子に誅殺された。

（註2）

孝徳天皇の長子。皇位継承の意思はなかったが、絶えず見えざる敵に怯え、遂には狂人を装うまでし

て逃れようとしたが、謀反の讒に会い、熊野へ護送中、兵に絞殺された。

即断はしかねるが、どちらの事件にも、「邪魔者は消せ」という中大兄皇子の意思が強く反映しているような気がする。

〈長兄の古人大兄皇子は不運な人であつた。蘇我大臣家にゆかりの人というだけで標的にされてしまった。中大兄皇子が長兄の娘（倭姫）を妃とし、後に皇后に立てたのは多分に贖罪の意味があつたのであろう。〉

有馬皇子も気の毒だった。生き永らえておればだ額田を凌ぐ当代随一の歌詠みとして名を成していたであろうに……

木簡に目を落とすと、そこには有馬に謀反をそそのかし、それを讒し、自ら捕縛して功を一人占めした蘇我赤兄の名が、朱線を引かれて第一番に書かれていた。赤兄は近江朝廷では大友皇子に次ぐNo・2の大臣だったから、当然といえは当然であつた。いふなれば第一級の戦犯なのである。

あるいは、大友を指嚇して吉野へ討伐の軍を向けたのはこの赤兄であつたかも知れぬという疑念は払拭できなかったが、大海人は朱筆を取り上げると、名前の上に「流」の字を付け加えた。赤兄は時の権勢に尾を振り、ここまで登りつめた野心家であり、大海人にとっては獅子心中の虫になりかねない人物であつたが、その動向さえきちんと把握していればそれほど危険な存在でもあるまいと判断

したからである。御史大夫の一人に名を連ねていた巨勢氏の統領巨勢人臣にも「流」を付した。このほうは老齢であつたし、巨勢氏に昔日の面影なく、反逆を企てるほどの力はないが、この際無益の殺生は避けて温情をかけておいたほうが得策であつた。赤兄の死一等を減じたもう一つの理由としては、赤兄の娘が妃として天智と大海人の後宮にいたことが挙げられようか。大海人はこの辺で眷族間の争い事に終止符を打とうと考えていた。そのためには種はできるだけ蒔かぬにこしたことはないのである。

何日も揺れ動いた思いに結着をつけると、大海人は筆を置いて宿直の者を呼んだ。

「これを清書せよ。なお、明朝全軍に布告するゆえ、夜明けとともに、百官を召集してお

くように」

木簡を押し戴いた宿直の者は、怪訝な顔をして大海人を見上げた。処刑者の数があまりにも少なかったからである。

「斬は右大臣中臣金連以下八名。後の二人は流罪だ。少な過ぎるか？」

「……」

口を動かしたが声にはならず、宿直の者は倉皇と退出した。

「これでよいのだ」

眩くと、大海人は目を閉じて大きく息を吐いた。と急に、虫の音が大きな高まりとなつて大海人の身を押し包んだ。へ虫が鳴いていると大海人は思った。そして、自分がこうして虫の音を聞いているのが不思議でさえあった。吉野を脱出以来五〇余日、戦塵にま

みれているうちに季節はいつか夏から秋の半ばに移り替わっていたのである。

「やはり、皇子は仁者でいらつしやる。ようご決断なさいましたな」

鳴き立てる虫の音を縫うようにして、また鎌足の声が聞こえてきた。

「聞き飽きたわ、その台詞。もう少ししな話をしようじゃないか。第一失礼じゃないか、俺の問いに答えずに消えてしまうとは」

「お二人の皇子様の死に、この鎌足が関わっていないとは言いません。と申しましても処断を勧めた訳ではありません。中大兄皇子を積極的にお諫めできなかったという意味で……」

「それで口をつぐんでしまったというのだな」

「左様でございます。もう少しましな話をしろと仰しゃいますも……。先程は額田様のお話が途中になっておりました」

「額田の何を話そうというのだ」

「さて、何からお話すればよいやら……。何分にも私より皇子のほうが、額田様のことはよくご存知ですから」

「皮肉を言うな」

大海人は臉の裏に浮かぶ鎌足に向かって言った。いつものことながら、なぜか大海人は鎌足の蒼白に近い端正な顔に対すると、自然に口調が荒っぽくなるのであった。嫌いというのではない。むしろその逆で、大海人は鎌足の冷徹さに憧れ、尊敬の念を以て親炙していたのであるが、この甘え癖は知り合ったころから鎌足が死ぬまでとうとう直らなかつ

た。今も、(生きている時も冥界に入っても、同じ顔色をしてやがる)と思うと、大海人は悪態の一つもつきたくなつたのである。

「額田とのことは、俺が美貌の年上の女に引かれて、母者の侍女を略奪したまでのこと。それがたまたま巫女であつたというだけで、俺は興味がなかつた。いや、興味がなかつたと言えば嘘になるか。一度だけ、何がきつかけで神の声が聞こえるようになったのかと聞いたことはあるが、額田は笑って答えなかつた。それっきり俺はそのことについては考えないことにした」

「ああ、やはり皇子は仁者でいらつしゃる」
そう言つて、臉の裏の鎌足は初めて大海人に微笑んで見せた。

(続く)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 五十八巻 六月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年五月二十五日 印刷

平成四年六月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 (有)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三六二)五九四四

〒〇三(振替)東京八―八二―八七

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

暮らしに
暮かすに

仏教成語辞典

寺内大吉・栗田順一編 価一二〇〇円

◎仏教の心と豊かな智慧のエッセンス！

仏教語が日常雑語として多くの人に使われているが、その仏教語を理解して、またその語意を把握して使っている人がどれほどいるだろうか。本書は馴じみ深い仏教成語一二九の原意、仏教の真髄をわかりやすく説いた仏教入門書。

△出版・発行▽

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三ー七 電話(〇三)三三三三ー三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六ー三三五一まで。

第五十八巻

六月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
平成四年五月二十五日印刷
毎月一回一日発行
平成四年六月一日発行